

# 兵庫カキ量産化に向けた養殖技術開発研究

【背景・目的・成果】 兵庫県の養殖カキは、筏(いかだ)に吊(つる)してから1年以内で収穫されることから、1年生大粒カキとして知られており、市場で高い評価を受けています。しかし近年では漁場の過密化やヘテロカブサ赤潮などの影響により、品質の維持が危ぶまれています。本研究では、1年生大粒カキの量産に適した養殖技術の開発を目的とし、適正な養殖密度とカゴ養殖の有効性を検討しました。

その結果、附着盤間隔を現状よりやや広げて垂下養殖をし、出荷前に一時的にカゴで蓄養することにより、大粒で高品質のカキを効率的に生産できることが分かりました。

(図1) 新たな養殖技術の効果を調べるには、生産されたカキの品質評価が必要になります。品質の指標として、カキの場合グリコーゲン量がよく知られていますが、それ以外に、品質の良いカキは洗浄、煮沸によって身が縮まらないことが知られています。そこで、むき身を冷海水30秒浸け、30秒煮沸した後の歩留まりが、品質指標になるかを検討した結果、歩留まりがグリコーゲン量と高い相関が認められ、現場でも手軽に測定できる新しい品質指標となることが分かりました。

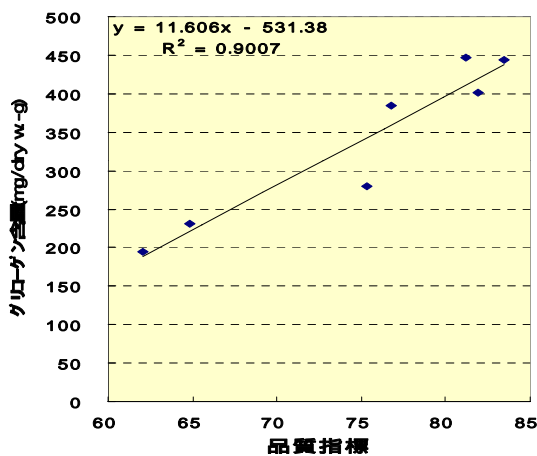


図1 カキの品質指標(冷水浸漬、煮沸後歩留まり)とグリコーゲン含量の関係

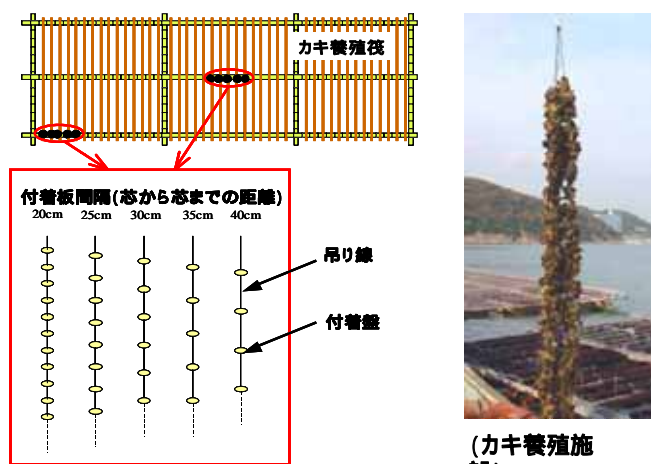


図2 附着盤間隔ごとのカキの成長調査模式図

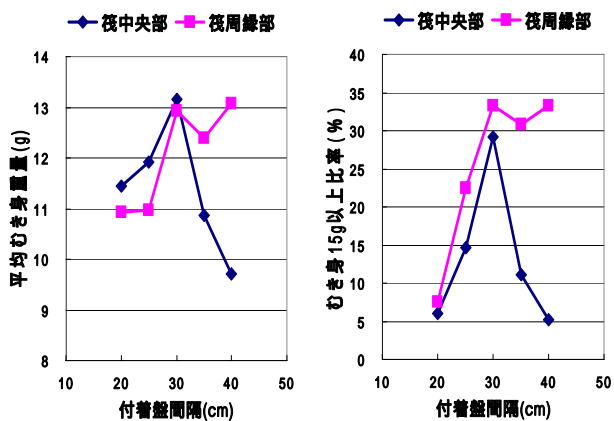


図3 附着盤間隔ごとのカキの成長

(図2, 3) 現在のカキ養殖での附着盤間隔は、25cmを基準としていますが、それよりやや広い30cm程度でカキの成長が最も速くなることが分かりました。



図4 カキ養殖カゴ

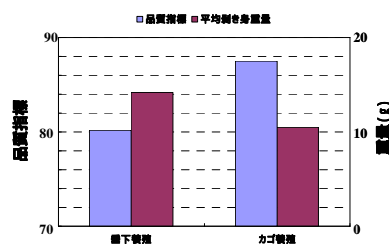


図5 カゴ養殖と垂下養殖の成長及び品質比較

(図4, 5) カゴ養殖と垂下養殖を比較するとカキの成長は垂下養殖の方が良く、カキの品質はカゴ養殖の方が良いという結果でした。

【技術の活用】 附着盤間隔の調節とカゴ養殖は養殖現場でいつでも実施できる技術です。本研究の成果は、県内のカキ養殖漁業者に情報発信され、高品質の1年生大粒カキを効率的に生産するために役立てられます。